

雪の精

野村胡堂

一

昼頃から降り続いた雪が、宵に小やみになりましたが、それでも三寸あまり積つて、いまだ今戸の往来もおうらいハタ絶えてしまいました。

えちじや

越後屋佐吉は、女房のお市と差し向いで、長火鉢に顔をほてらせながら、二三本あげましたが、寒さのせいか一向発しません。

「銭湯へ行くのはおつくうだし、あんま按摩を取らせたいにも、こんな時は意地が悪く笛も聞えないね」

「お前さん、そんな事を言つたつて無理だよ。この雪だもの、目の不自由な者なんか、歩かれはしない」

そんな事を言いながら、丁度三本目の雪を切つた時でした。ツイ鼻の先の雨戸をトン、トン、トンと軽く叩く者があつたのです。

「おや——」

お市は膝を立て直しました。宵とは言つてもこの大雪に往来の方へ向いた、入口の格子を叩くならまだしも、川岸かしへ廻つて、庭の木戸から縁側の雨戸を叩く者があるとすると、全く唯事ではありません。

「どうしたんだい」

と、佐吉。

「雨戸を叩く者があるんだよ。こんな晩にいやだねえ、本当に」

「開けて見な、むじな たぬき貉や狸なら、早速煮て食おうじゃないか。酒はま

だあるが、さかな肴と来た日には、ろくな沢庵たくわんもねえ」

佐吉は少し酔っているせいもあったでしょう。爪楊子つまようじで歯をせ

せりながら、太平楽を極めますが、いくらか酒量の少ない女房の

お市は、さすがに不気味だったと見えて、幾度も躊躇ためらいながら、

それでも立ち上がって、雨戸へ手を掛けました。

同時に、もう一度トン、トン、トンと軽く叩く音、続いて若い

女の声で、

「ここを開けて下さいな——」

と、大地の底から響くような細い声が、ハッキリ雨戸の外に聞えるのです。

「誰だえ」

お市は心張棒しんぼりぼうを外すと、思い切つてガラリと開けました。

角兵衛獅子かくべえしの親方を振り出しに、女衞ぜげんの真似をやつたり、遊び

人の仲間へ入つたり、今では今戸に一戸を構えて、諸方からすがねへ烏金を

廻し、至つて裕福に暮している佐吉の女房です。鬼の亭主に鬼の

女房で、大概たいがいの物に驚くような女ではありませんが、この時ばかりは全くギョツとしました。

外は真つ白——。

人間は愚か、むじな貉も狸もいる様子はなかつたのです。

好い加減に積つた雪は、狭い庭を念入りに埋めて、その上に薄月が射しているのですから、その辺には、物の隈もありません。
庇ひさしの下はほんの少しばかり埋め残してありますが、物馴れたお市の眼には、そこに脱ぎ捨ててある、沓くつぬ脱ぎの下駄までハッキリ読めるのです。

「誰もいはしない、変だねえ」

「そんな事があるものか、今の人の声がしていたじゃないか」

「そう言ったってお前さん、猫の子もいないよ」

お市はそう言いながら、戸袋に左手でつかまつたまま、まだサラサラと降る雪の中へ、何の気もなく顔を突き出したのでした。

「あッ」

恐ろしい悲鳴。

驚いて佐吉が立ち上がった時は、お市の身体は、もんどり打つて、雪の庭へ――、真逆様に落ちてしまったのでした。
まっさかさま

「何て間抜けな事をするんだ。怪我けがをしないか」

佐吉はそう言いながら、縁側へ飛出して差のぞくと、お市の身体は雪の中に転落して、ノタ打ち廻りながら、

「お化ばけだッ」

辛くもそう言った切り、がっくり崩折くずおれてしまった様子です。

見ると、頸筋ふきだから噴出した恐ろしい血潮が、お市の半身と、その

辺の雪を物凄まじく染めておりますが、見渡したところ、縁の下にも、庭の中にも、お化は愚おろか、人間の片かけらも見えません。

佐吉はそれでも、漸く気を取直して、女房の身体を縁側へ抱き上げましたが、何時の間あんどんにやら、行燈あんどんを蹴飛ばして、灯りを消してしまった事に気が付きました。

「お駒、大変だッ、灯を持って来い」
少し離れているお勝手へ怒鳴どなると、

「ハ、ハイ」

居眠りでもしていたらしい、下女のお駒は、手燭てしよくを持って飛込んで来ましたが、その時はもう、何もかも済んでおりました。お市はすっかりこと切れて、三十女の豊満な肉体を、浅ましく歪ゆがめたまま夫の膝に抱き上げられ、越後者の、身体だけは丈夫そうな下女のお駒は、手燭を持ったまま、ガタガタ顫えているのでした。

二

「八、こう言うわけだ。石原の兄哥あにきの縄張りだが、利助兄哥はあの通り身体が悪くて、娘のお品さんが代って仕事をしている有様

だから、どうすることも出来ない。それに、越後屋佐吉と言う人が自分でやって来て、相手が人間だか化物だか知らないが、あんまり人を馬鹿にしたやり口だから、何とでもして女房の鬻かたきを討つてくれと言う頼みだ」

捕物名人銭形の平次は、子分の八五郎——一名ガラツ八へ妙にしんみりした調子で話して聞かせました。

少し人間は半間ですが、案外鼻の利く八五郎に、少しでも事件を扱わせて、行く行く立派な御用聞に仕立ててやろうと言う平次の腹でしょう。

「親分、大変面白そうだが、下手人げしゅにんは一体何でしょう」

「それが解らない」

「鎌鼬かまたちか何かじゃありませんか」

小さい旋風せんふうが空中に真空の場所を作るために、そこへ行合わせ

た人の皮肉を破って、体内の空気が出ることがあるのを、昔は鎌かま鼬いたち又は神逢太刀かみあいたちと言って恐れたものです。

「相変わらずお前はお先っ走りだね、庭の雪には下駄の跡があつたんだよ」

「へエ——」

「鎌鼬がまさか下駄を穿はいて来はしまい」

と平次。

「それじゃ矢張り人間かな」

どうも甚だ血の廻りが宜しくありません。

「お市とか言う女房の喉笛のどぶえを下から飛付いて掻き切ったんだ。兎に角人間には相違ないだろう」

「佐吉夫婦うらみに怨のある人間はありませんか」

「あり過ぎるほどだ」

「厄介な野郎だネ」

「角兵衛獅子の親方と、女衞ぜげんと、金貸しをやってたんだ。どこに敵がいるかわかるものか」

「へエ——」

「ここで考えたって始まらないよ。兎に角、行つて見るがいい、思いの外手軽に解るかも知れない」

「親分は？」

「俺はそれからの事にしよう。他に用事もあるから、兎に角、今戸の殺しはお前に任せるよ。宜いかい、八」

「弱つたなア」

「弱ることがあるものか、八五郎もこの辺が手柄の立て所じゃないか」

「そう言えばそれに相違ないが」

子分思いの平次は、これほどの手柄を、ガラツ八に譲ゆずつてやる

つもりでしょう。二つ三つ肝腎かんじんな注意をすると、わが子の初陣ういじんを送り出す親のように、緊張した心で今戸いまどの現場へ送り出してやるのでした。

ガラツ八が越後屋へ着いたのは、事件のあつた翌る日の昼頃、係り同心が町役人と一緒に引揚げた後で、お市の死体は奥の一と間へ寝かし、三輪みのわの方七という顔の古い御用間が、二人の子分と、振舞酒ふるまいざけに酔って、ボツボツ引揚げようという間際でした。

「お、八兄哥か、大層鼻が良いんだネ」

と万七。まさか主人の佐吉が、親分の平次へ頼みに行ったことは知りません。相手が甘いと見て、少、し、か、ら、か、い、面、に、な、り、ま、す。

「三輪の親分御苦勞様で、——石原のが身体が悪いんで、あつしが申訳もうしわけだけに覗きに來ましたよ。三輪の親分がいて下されば、ここから帰つても宜い位のもので、——へッへッへッ」

これは、親分の平次に、万一、三輪の万七に逢つたらこうとくれぐれも教わつて來た口上。まことに行届いておりますが、お仕舞いのへッへッへッだけが余計です。

そう言われると、万七も悪い心持はしなかつたのでしよう。それに、どつちにしても石原の利助の縄張りうちで、八五郎をからかい過ぎるわけにも行かず、もう一つは、事件がいやに神秘的で、容易に見当が付きそうもないと思つたのでしよう。

「そう言われると年寄の出しや張る幕じやないようだ。八兄哥、話は聞いたろうが、どうもこの殺しは見当が付かないぜ」

そう言いながら、二人の子分と顔を見合わせて、妙にニヤニヤしております。

意地の悪そうな四十男。世上の噂では、二足の草鞋にそく わらじも穿いてい
ると言う話、八五郎の相手には、少し荷が過ぎます。

三

越後屋佐吉と言うのは、四十を越したばかりの、北国者らしい

鈍重どんちゅうなうちに、何とかしたた強か味のある男ですが、女房が不思議な殺されようをしたので、さすがに、すっかり度を失っております。

早速八五郎を一と間へ案内して、北枕きたまくらに寝かしてある、女房お市の死体を見せてくれました。覆おおいを取ると、斬られて死んだ者によくある、白蠟はくろうのような感じのする顔で、年の頃三十五六、神經質な口やかましい女ということは、八五郎にもよく受取れます。傷きずは頸きずの右の方から喉笛へかけて、斜ななめ一文字に深々と口を開いて、見るも無気味な有様、これでは一たまりもなかつたでしょう。

「血が出ましたか」

「出たの出ないの——庭の雪が真っ赤になりましたよ」

有名な銭形の平次が来ずに、少し好人物らしい子分の八五郎が来たのが、佐吉の癩しやくにさわったのでしよう、物の言いようが少しばかり、突慳つっけんどん貧です。

「フーム」

ガラツ八は唸うなりました。

「八兄哥、血のことを気にするようじゃ、鎌鼬かまいたちという見当だね。

鎌鼬は傷の深い割に血の出ないものだって言うが、江戸は上様うえさまのお膝元で、鎌鼬は昔から出ねえことになっているぜ」

と首を出した万七。冷笑気味な口吻こうぶんですが、馴れた目だけに、どこか鋭いところがあります。

「――」

ガラツ八は黙って点頭うなずしました。鎌鼬でないことは、親分の平次にも言われましたが、傷口の反りそ具合があまりに見事だったので、ツイ自分の最初の心に立ち返ったのでした。

「それによ、八兄哥。左利きの鎌鼬ってものはあるめえ」

万七は言い得て妙と言った顔で、死体の右の頸筋――人間の手で上から切り下げた、斜ななめの傷口を指すのでした。

「曲者は下駄を履はいていたそうですね」

とガラツ八。

「踏み荒してしまつたが、まだ庭に雪がありますから、見当位は

付きます。こうお出でなさい」

佐吉に案内されて、次の間へ行くと、縁側に近く長火鉢を置いて、すべての調度は昨夜のまま、障子を開けて一と目庭を見ると、成程散々に踏み荒しましたが、消え残る雪の上には、血とも煤すすとも付かぬ程度に、薄赤い斑点ほんてんが見られないことはありません。

「下駄の跡は一人でしたか」

「庭の中にはかなり足跡もありましたが、皆んな同じ齒の跡で、木戸から入って出たのは一人分だけでしたよ。」

ガラッ八も途方にくれました。十坪ばかりの狭い庭には、亭主の殺風景な性格を反映して、石一つ、植木一本ない有様、僅かに

戸袋の側の手洗鉢ちようずばちの下に南天なんてんが一株ありますが、それと言つても、人間が潜りもどうも出来るほどのものではなく、狭い場所一パイに建てた家で、たった一つの庭木戸の外には、往来へ出る道も、表へ廻る路地もありません。

「木戸の向うは川岸かしつ縁ぶちの往来ですね」

「そうですよ、あの雪で昨夜は人通りも少なかつたようですが、それでも宵のうちですから、チラホラ、通らないことはありません」

と佐吉。

「この辺に、お前さんを怨うらんでいる者はありませんか」

「ありますよ、どうせ良く言われっこのない性分で、町内の人皆んな敵見たいなものでさア——」

少し言い草は乱暴ですが八五郎の半間な調子に業を煮やした故もあつたでしょう。佐吉は忌々しそうに舌打をしました。

四

「雇人は？」

「二人いますよ。一人は越後者で、お駒と言う下女、一人は房州者で、これは借金の取立てや使い走りをさせておりますが、与次

郎という男。もつとも、この与次郎の方は、町内の銭湯へ行つていて、女房が殺された時は家にいませんでしたよ」

佐吉のそう言うのを聞きながら、八五郎は障子を締めると、今度は家の中の間取りを見て廻りました。入口の格子の右が女中部屋で、その先がお勝手、お勝手はすぐ横町の路地へ、木戸一つで通ずるようになっておりますが、御用聞の出入りがあるので、この辺の雪も踏み荒されております。

入口を隔へだてて、左が死体を置いてある部屋、その奥が夫婦の居間で、これは昨夜事件のあったところ。妙な間取で、座敷か納戸なんどを通らなければ、居間から直接お勝手へは出られません。

下女のお駒は、流し元で遅い朝飯のお仕舞をしておりました。二十三四の色白の女で、様子もそんなに悪くありませんが、半面のおおやけどの大焼痕で、顔を見るとがっかりします。

姉妹二人、角兵衛獅子に売られたのを、佐吉が引取って暫く稼がせていましたが、角兵衛を廃業してからは、下女にして使つて、少しは給金でも溜めさせて、故郷の越後へ帰すつもり——、と佐吉は問わず語りに説明してくれました。

もつとも、このお駒というのは、妹の方で、姉はお才さいと言つて、大変に良い縹緞だったが、一年ばかり前に死んでしまった——とこれも佐吉の話。自分の事を噂されながらも、お駒は鈍感どんかんな女に

よくある無関心さで、機械的にお勝手の仕事を続けております。

「お駒さん、昨夜は驚いたろう」
ゆうべ

ガラッ八が水を向けると、

「驚いたよ、お神さんがおっ死んだんだもの」
ち

何を当り前な事を——と言わぬばかりの面構は、
つらがまえ すっかり我が

名御用聞の八五郎を憂鬱ゆううつにしてしまいます。

「お神さんの殺された場所で、何か見るか聞かしたかったかい」

「旦那が大きな声で、灯あかりを持って来いって言うから、棚たなの上の手

燭へ灯を移して、大急ぎで飛んで行っただよ、何も聞くもんか」

これでは取り付く島もありません。

角兵衛獅子をやつて歩いたというのは、多分十年も前のことでしょう。見たところ、楽な奉公によく肥つて、そんな芸当をやつた身体とも見えないのです。

ガラツ八は仕様事なしにお勝手口の外を眺めました。取込みでろくに雪も搔かかなかつたのでしよう、下男の与次郎が、浅葱あさぎの手拭ほおかむを頬冠ほおかむりに、竹箒たけぼうきでセッセと雪を払っております。師走しわすの薄い日に、昨夜の雪がまだ解けそうにもないのですから、仕事をしていると、寒さが骨身にこたえるのでしよう、時々立止つては、ハアと拳骨げんこつに息を吹掛けております。

「八兄あにい哥」

後ろから、肩を叩いたのは、みのわ三輪の万七。

「何ですえ、親分」

「気が付かないか」

「へエ——？」

「それなら宜い、後で縄張りがどうの、石原がこうのって文句は言わないだろうな？」

妙に絡からんだ物の言い廻しです。

「下手人の目星でも付きましたか」

「そうだよ。八兄哥、後学のために話そう、あれを見るが宜い」
万七の指したのは、お勝手の外を掃はいている、与次郎ほうきの箒ほうきを持

つ手です。

「——」

「あの箒を持つ手が、恐ろしく不自由なのに気が付かないかい」

「そう言えばそうかも知れませんネ」

「そうかも——じゃないよ、あの与次郎と言う男は確かにひだりき左利き

だ」

「えッ」

「先刻、下手人は左利きだ——って俺が口を滑らしたのを小耳に挟はさんで、疑われたくないばかりに、不自由な思いをして右利きのような顔をして、俺達から見えるところで雪を掃いてるんだ。イ

「やな細工じゃないか」

「成程」

万七に注意されて、そつと与次郎の方へ目を走らせると、箒を
持ったのは右手には相違ありませんが、成程不自由そうで、その
作為さくいのあとが、一と目でわかります。

「主人に聞くと、あの野郎、たしかに左利きだと言う事だ。ね、
八兄哥、御用聞はこう言う細かいところへ眼が届かなくちゃ物に
なられえよ」

万七はそう言いながら女物の下駄を突かけてお勝手口へ出る。
「与次郎とか言ったネ、ちよいと訊きてえことがある、番所へ一

緒に来て貰おうか」

釘拔くぎぬきのような手が、ピタリと、箒を持つ手頸に掛りました。

「あつ、何をするんだ」

立ち竦すくんだ与次郎、浅葱あさぎの頬冠こそしてありますが、苦味走つた三十男、咄嗟とっさの間に、万七の手を振りもぎつて逃げようとする
と、

「御用ッ」

「神妙にしろッ」

路地から二人の子分が疾風しつぷうの如く飛込んで来るのでした。

五

万七にしてやられて、ガラツ八の八五郎は、まつしぐら驀地に神田へ取つて返しました。

「親分どうかしておくんさい。私はこんな恥を搔かされたことがない」

「馬鹿野郎、又何かドジな真似をしたんだろう。見て来た通り、真つ直ぐに話してみな」

銭形の平次は、八五郎を叱りしか飛ばして、報告の順序を立てさせました。

「何？ 庭には、川岸かしの往来に向いた木戸より外に入口も出口もねえ、—— 銭湯へ行ったと言う、与次郎が疑われるわけだな、足跡の様子では下駄は、女物か、男物か」

「それが時が経っているのと、散々に踏み荒しているから、まるつきり解らねえ」

「仕様がねえなア、銭湯へは行って訊いたろうな、越後屋の女房が殺された時刻に、与次郎が行っていたかどうか」

「そんな事にぬか拔りはねえ。朝日湯の番台の親爺に訊くと、亥刻よつ（十時）少し前にやって来て、自慢の咽のどで新内を唸りながら半刻はんときばかりポチャポチャやっていたって言いますぜ」

「人でも殺そうと言う程の野郎なら、わざと半刻位は下手な新内でも唸っているだろう。後か先に、ほんのちよいと庭口へ廻れば、仕事は済むんだから」

「親分までそのつもりじゃ話が出来ねえ」

ガラツ八はすっかりしよげ悄気てしまいます。

「ところで、死骸の傷は斜横に真一文字に付いてると言ったね」

「そうですよ」

かまいたち

「鎌鼬なら、銭形に付くか、筋か骨に添って曲った傷が付くから、

矢張り人が切ったに間違いはないね、——ところで、切口の肉は、どんな工合になっているんだ」

「それが可怪おかしいんだよ、親分、恐ろしく反そって、何かこまさう鉞かりでも割いたような工合だ」

「斧おのや鉞のどで、喉のどを割く奴はあるまい、峰みねの高い刃物——多分合せかみそり剃刀かな」

「えッ」

合せ剃刀と睨にらんだのは慧眼けいがんですが、それにしても下手人は益々わからなくなるばかりです。

平次は到頭いまど今戸まで出掛けて見る気になりました。三輪の万七の鼻を明かすつもりは毛頭なかつたのですが。

「下手人は左利きと聞いて、自分の左利きを隠そうとしたと言う

のはおかしいな。そんな事をしたところで、主人か下女に訊かれれば、すぐ解ることだから、脛すねに傷持つ者なら、反ってそんな細工はしたい筈だ。これは少し面倒なことになるかも知れないよ」

平次はそう言いながら、ガラツ八を案内に、今戸へ出かけて行つたのです。

越後屋へ行く前に、近所でいろいろ噂を聞いて見ましたが、佐吉夫婦の評判はまことに散々で、冗談にも褒める者は一人もありません。

欲が深くて因業いんごうで、若い時から随分人を泣かせて来た様子ですから、どこに深怨しんえんの刃やいばを磨く者があるかも知からない情勢です。

下男の与次郎が、殺されたお市と何か関係でもあるのではないかと、言う疑いも、一応は持ってみましたが、これも問題になりません。お市は四十近く、与次郎は三十になったばかり、女の方はヒステリックな、どちらかと言えば醜女ぶおんなで、与次郎は、こんな仕事をしている者には勿体ないような好い男、町内の娘っ子が大騒ぎにぎをしているばかりでなく、岡場所こやしやけころへ握り拳で出かける程の色師です。

金が目当て——と、言うことも考えられますが。それなら、女房だけ殺して、姿を隠したんでは一文にもならず、二度出直す時間もあつた筈なのに、それっきり逃げ出してしまったのは、多分、

下手人の方でも、人を一人殺して、面喰ったためだろうと思われ
ます。

平次は一応家の内外を調べた上、いよいよ自分の考えを確めた
らしく、主人の佐吉に何やら耳打ちをして、誰を縛るでもなく、
懐手のまま神田へ帰ってしまいました。

それから三日目の朝、越後屋の佐吉は、蒼あおくなつて、平次のと
ころへやつて来ました。

「親分、昨夜ゆうべもやつて来ましたよ」

「えッ」

「与次郎が縛られたから、それで宜いのかと思うと、あれは三輪の親分の見当違いでしたね」

「どうなすったんだ。詳しく話して見なさるが宜い」

平次も思わず膝を乗り出します。

「こうなんです、——女房の葬とむらひいを済ませて、やれやれと思うと、又雪でしょう。お駒に一本つけさして長火鉢の前でチビチビやっている、彼れこれ亥刻よつ過ぎだったでしょう。庭の雨戸を、又トン、トン、トンと叩く者があるのです」

「」

平次も、側で聞いているガラツ八も。思わず、ぞつとしました。

雪の精



©2017 萩 柚月

「暫く黙っていると、女のか細い声で、——ちよいと開けて下さい——と言ったようですが、何分あの騒ぎの後でしょう、頭から水をブツかけられたようになって、恥はずかしい話ですが動くことも出来ません。そのまま凝じつとしてっていると、それつきりあきらめて帰った様子です」

「——」

「翌る朝、夜の明けるのを待ち兼ねて、庭を開けて見ると、下駄の跡が一パイ」

佐吉はゴクリと固唾を吞みます。

「それは面白くなって来た——越後屋さん、帰ったら、近所中へ

こう言いふらして下さい——昨夜も変な野郎が来て今度は俺を誘き出そうとしたが、雪のせいで腹が痛くて顔を出せなかつた。

今度来たら、キツと女房の下手人の顔を見定めてやるから——と

「少しも面白くはありませんが、やって見ましよう。だが、私はもう一度来ても、顔を出すのは御免を蒙りますよ」

強か者らしい佐吉も、この『見えざる敵』にはすっかり脅かされた様子です。

「大丈夫、相手は雪の晩でなきやア来ないと解つたようなものだから、この次の雪の降る晩に、私か八五郎が、そつと戌刻（八時）前から行って庭口から入れて貰いましょう。それなら心配はない

でしょう」

「へエ——、まあ、そうまでして下されば」

佐吉は吞込のみこみ兼ねた様子で帰って行きました。

六

よく雪の降った年ですが、それから七日ばかりは晴続き、押詰って、二十四日、夕景から催もよおした雪が、宵には綿を千切って叩き付けるような大降りになりました。

越後屋から迎えを待つまでもなく、ガラツ八は今戸へ駆け付け、

庭口からそつと例の部屋へ入り込みました。

飲み物も食い物もフンダンに用意させましたが、人が来ることは誰にも話させず、下女のお駒も、宵のうちから床へ入れて楽寝をさせ、佐吉一人、淋しく待っているところへ、八五郎が行ったのですから、佐吉の喜びと言うものはありません。

半分は手真似てまねで物を言つて、長火鉢を間にした差向い、妙に黙りこくつて飲んでいると、やがて、亥刻よつ過ぎ。

雨戸は一種のリズムを持って、トン、トン、トンと鳴ります。八五郎は懐の十手を抜いて、そつと立上がると、

「待って下さい。私の顔を先に見せなきゃア、逃げるかも知れま

せん」

佐吉もすっかり胆きもが坐った様子で、八五郎を押えると、雨戸へ手を掛けてサツと押し開けました。

闇から湧き上がったように、サツと吹込む一団の吹雪、それに包まれると見るや、

「あッ」

佐吉は額を押えて縁側へ倒れました。

「曲者ッ」

続いて八五郎、一気に闇の庭へ、跣足はだしで飛降りましたが、四方は塗り潰つぶしたような大吹雪おおふぶきで、黒い犬っころ一匹見付かりません。

引返して見ると、額から頬へ見事に斬り割かれた佐吉、ようや漸く起き直って、血だらけな半面を両手で押えているのでした。

それからの騒ぎは書くまでもありません。幸い傷は浅かったので、用意の焼酎しょうちゆうで洗って、晒さらしでグルグル巻くと、寝呆けたお駒を叩き起して。町内の外科を呼ばせました。

少し落着いたところで、いろいろ訊いて見ましたが、唯、雨戸を開けると同時に、一団の白い吹雪を顔へ叩き付けられたように覚えると、額から頬へ、焼鑊やきじしてを当てられたように感じて引くり返ったと言うだけの事、誰が斬って、どうして逃げたかまるつきり見当も付かない始末です。

翌る朝、神田から錢形の平次が駆け付け、三輪の万七もやって来ましたが、庭の足跡は、踏み荒されない代り、今度は雪に埋まつてしまつて、八五郎が入つたのも定かでない有様、曲者はどこから来て、どこへ逃げたか、嗅ぎ出す手掛りと言うものは一つもありません。

散々責めたが、何としても白状をしない与次郎は、これを機会しおに許されて帰りました。お市を殺したのも、佐吉を襲おそつたのも、手口は全く同じことですから、三輪の万七も、この上与次郎を責める口実もありません。

それに、錢形の平次は、

「三輪の、そう言っちゃ済まないが、下手人は左利きじゃないよ」と言い出したものです。

「えッ、どうしてそんな事が解るんだ」

万七の唇は少し尖りますとがが、平次は事もなげに、

「刀か脇差だと、これは左利の業だが、傷の工合じゃ、どうしても得物えものは合せ剃刀かみそりだ。ネ、そんな短かい物で人の命でも奪ろうとすると、逆手さかてに持たなきやア役に立たないよ。右の喉笛や、右の頬ななめを、斜に斬り下げたのはそのためだ。突き傷のように、恐ろしい力で下へ斬り下げているだろう」

「なある——」

三輪の万七、一言もありません。

併し、右利きとわかつたところで、下手人の当りが付いたわけではありません。右利きは左利きの十倍もあるのですから、僅かに、与次郎が下手人でないと言うことが、消極的に解つただけの事です。

七

その時、妙な者が訪ねて来ました。

「銭形の親分さんが来ていなさるそうですが、ちよいとお目にか

かつて申上げたいことがあります」

お駒に取次がせたのは、この辺に網あみを張って、吉原へ通う客を拾つじかごう辻駕籠の若い者——、と言ったところで、四十過ぎしよたいづかの世帯疲れの目立つ、不景気な駕籠屋が二人でした。

「私に用事と言うのは、お前さん達かい。取込み中で、お通しは出来ないが、ここで聴かして貰いましょう。どんな事なんだい」

銭形の平次は、あがりがまち上框へ煙草盆をブラ下げて来て、お駒に座布団などを持って来させました。

「昨夜、実は妙なことがあったんです。——言おうか言うまいか、相棒とも相談したんですが、ここのお神さんが殺されたり、旦那

が怪我をなすつた——ことを聞くと、黙つてもいられません」

「そうともそうとも、気の付いた事があつたら、何でも話した方が宜い。決して掛り合ひなどにはならないようにしてやるから」

「有難う御座います、実はこうなんで、親分さん——」

年取つた駕籠屋の話と言うのは、実に奇怪を極めました。

——昨夜、亥刻よつ少し過ぎ、この二町ばかり先の稲荷いなりの祠ほくらの前で、

降る雪を凌しのぎながら、少し小止みになつたら、馬道の方へでも出

て、吉原通いの客を拾おうと相談をしていると、どこから出て来

たか、チヨコチヨコと現われた一人の娘が、白い手拭てぬぐいを吹き流し

に冠つて、観音様まで大急ぎでやってくれと言つたのだそうです。

どうせ帰り道、相手は新造ですから、賃銀ちんぎんなんか宜いかげんに定めて、駕籠たれの垂をあげると、娘は小風呂敷包を持ったまま、馴れた調子でポンと乗りましたが、わざわざ寒い川岸を通らせて此家ここの裏口のあたりまで来ると、急に用事を思い出したから、ここで降ろしてくれと言うのです。

争うほどの事でもないのです、そのまま駕籠を停めたのは、ちよまうど此家ここの裏口、垂を上げると、中から出たのは、先刻まつざかもめんの松坂木綿らしい粗末な綿入を着た娘とは似も付かぬ、縮緬ちりめんの白無垢しろむくを着て、帯まで白いのを締めた、鷺娘さぎむすめのような、凄まじくも美しい新造だったと言うのです。

狭い駕籠の中で、どうしてそんな早変りが出来たか、渡世の駕籠屋も想像が付きません。兎に角、急に臆病風さそに誘われて、定めた駕籠賃ももらわずに、山の宿の方へ一散に逃げ出してしまったと言う話——。

「親分さん、お狐様かお雪娘か知りませんが、どうもろくなもんじゃ御座いませんよ。御用心なさいまし。へエへエ——こんなにだちんお駄賃を頂いてはすみません」

二人の駕籠屋は、余分の駄賃を貰った上、所、名前を言つて歸つてしまいました。

「ね、錢形の、こいつは鎌鼬かまたちじゃなくて、お稲荷様かも知れない

ぜ。主人は鳥居へ小便でも掛けたことがあるんじゃないか」

万七は妙にニヤリニヤリしておりますが、平次はそれを聞くと、追っ立てるように外へ飛出しました。

裏口は往来を距てて大川。

もう少し先へ行くと都鳥と、みやこどり瓦屋が名物ですが、この辺はまだ

町の中で、岸にはいろいろのゴミが、雪と一緒に川面を埋めております。かわも

「八、物干竿を一本貸りてものほしざお鳶口を結とびぐちえて来い」

「へエ——」

持って来た二間竿。

先に鳶口を付けて、川面の雪と雑物とを掻き廻して行くと、間もなく妙なものが引つ掛りました。

「おやッ」

引上げて見ると、少し碧血あおちに染んだ白無垢しろむく。紐で縛ってありますが、ほどくと、まぎれもない上質の白縮緬しろちりめんで、白羽二重帯まで添えてあるのです。

「おやッ、これはお葬とむらいで着るのとは違うぜ」
と万七。

「吉原なかで、花魁おいらんが八朔さくに着る白無垢だよ。三輪の、お狐様じゃないようだね」

平次はそう言つて、考え深く水漬りの白無垢をひろげました。

八

白無垢しろむくは出ましたが、下手人はそれつきりわかりません。娘を

乗せて来たという駕籠屋まで引張り出して、来た道を逆ぎやくに、稲荷

の社やしろまで探して行きましたが、その辺には、佐吉の烏金からすがねを借りて、

ひどい目に逢わされている家は、門並の有様ですから、どこの娘をしょつ引いて宜いのか、縛ることを好きな万七も、手の下しよ
うがなかつたのです。

佐吉のために、身を売った娘もあろうし、女衞せげんの真似をしてい
る時、散々人も泣かせた筈ですから、怨うらみを買った覚おぼえは算かぞえ切れな
いほどあるでしょうが、しかし、八朔さくの白無垢おいらんを着て、雪の夜に
吉原から忍んで殺しに来るほどの大胆な花魁おいらんがあろうとは想像
も出来ないことです。

佐吉の傷は間もなく平癒へいゆし、お駒と与次郎は、相変らず忠実に
勤めておりますが、それからは、別に変ったこともありません。
もつとも、佐吉が強欲で、二人の給金を何年越払わないそうで、
イヤな思いをしても、急に飛出すわけには行かない事情もあつた
ようです。

その次に雪の降ったのは、明けて翌年の正月十三日。この時は朝から粉雪が降り続いて、夕刻には、三寸ばかり積り、それからカラリと晴れて、大変な美しい月夜になりました。

「今晚きつと下手人を探してお目に掛けますから、掛り合いになつた人を、皆んな集めて置いて下さい」

平次からの使で、八五郎が越後屋へそう言いに行つたのは夕暮。それから支度に取りかかつて、三輪みのわの方七とその子分、銭形の平次とガラツ八、それに与次郎とお駒、主人の佐吉、これだけ集めて置いて、いつぞやの駕籠屋二人に、酒手さかてをやつて稲荷様の前に網を張らせ、浅草へ行く娘でなければ、乗せてはならぬと言ひ付

けて置きました。

相変わらず酒が出ます。お勝手も入口も締めず、用心が悪いようですが、名題の御用聞が二人いるのですから、空巢狙あきすねらいの心配もなく、今晚は例の居間の長火鉢の前へ、一人残らず集まってしまいました。

亥刻よつ少し過ぎ、何となく夜の寒さが、背に沁しみ渡る頃、みんなが期待した通り、――

トン、トン、トン、

雨戸は鳴ります。一同はぞつと顔を見合せました。続いて、

「ちよいと、ここを――」

と、か細い女の声。佐吉も子分達もガラツ八も与次郎も顔色を失いましたが、一向平気なのは銭形の平次だけ。中でもお駒は袖に顔を埋めて、畳の上に突っ伏してしまいました。

「サア、お駒さん。お前でなきやアならない事がある。行つてあの雨戸を開けるんだ」

と平次、ガタガタふる顫えているお駒を抱き起すように、縁側へ伴れ出しました。

続いて、万七、佐吉、ガラツ八、与次郎。

「お駒さん。確しっかりするんだ。あれは、お前の姉さんのお才さいだよ、玉屋小三郎の抱かかえ、一時は全盛を謳うたわれた玉紫花魁たまむらさきおいらんだ。怖こわがること

はない」

「あれツ——」

お駒は振りもぎって逃げようとしたが、平次は後ろからはがいじめ羽搔締はがいじめにして、離そうともしません。

続いて又、トン、トン、トン、と叩く音、陰いんに籠こもったその物凄すごさと言うものは——。

「お駒さん、あれ、あれ、お前の姉さんが呼んでいるじゃないか。

越後屋佐吉——この主人に、角兵衛獅子で何年となく虐いじめ抜かれた上、年頃になって、光り輝やくように美しくなると、自分の娘分にして、玉屋へ年一杯に売り飛ばされ、その上、佐吉夫婦が、

絞しほって、絞しほって、絞しほり抜いて、悪い病気に罹かかって、身動きの出来なくなるまで絞しほり取られた姉のお才だ」

「――」

平次の言葉は、物凄い空気の中に、地獄の判官の宣告のように響きました。

「お前の姉が、佐吉夫婦を怨うらんで、糸のように痩せ細った身体で、頸くびを縊くって死んだのは、丁度一年前、佐吉夫婦を怨うらんで、よく似合うと言われた八朔さくの白無垢しろむくを着て、雪の夜を選んで仕返しに来るのも無理はない。――これだけ話せばあの外から雨戸を叩くのは。誰だかよく解るだろう。さア、お駒、怖がることはない。思

「い切つて開けて見るが宜い。そら、又叩いているじゃないか——」
 何と言う恐ろしい緊張でしょう。主人の佐吉は積悪せきあくに責めさいなまれるように、縁側へ崩折れてガタガタ顫えふる、ガラツ八も、与次郎も、万七でさえも、顔色を失つて、成行なりゆきを見詰めるばかりです。

「お駒、お前が開けなければ、俺が開けてやる。それ」

平次の手は雨戸にかかると、アツと言う間もなく一枚引開けましたが、外は、雪の上に照る十三夜の皎月こうげつ。狭い庭はたった一と眼に見渡されますが、物の翳かげもありません。

「玉紫たまむらさきの花魁おいらん。よく聴くが宜い、お前の妹のお駒は、一生困らぬ

だけの金を持たせて、明日にも故郷の越後へ帰してやる。もうここへ出ちゃならねえぞ、解ったか——南無阿弥陀仏」

平次が月の庭へ手を合せて拝むと、お駒も、佐吉も、ガラツ八も、釣られたように、念仏を称えて、とな白々とした庭を眺めやるのでした。

明る日、お駒は溜たまった給料を受取った上、外に手当百両を貰い、平次とガラツ八に送られて、故郷の越後へ発ちました。確かな道みち伴を見付けて、板橋から別れる時、

「親分、この御恩は忘れません」

お駒は何べんも何べんも繰り返して、江戸へ引返す平次の後姿を拝んでおります。半面大焼痕の醜い女ですから、道中も先ず無事でしょう。平次は重い荷をおろしたような心持で、ガラツ八と一緒に帰って来ました。

「ね、親分。あの下手人は玉紫とか言う花魁おいらんの幽霊なんですかいとガラツ八、少し獅子ししツ鼻ぼながキナ臭くうごきます。

「馬鹿、幽霊が人を殺してたまるもんか」

「すると」

「お前だから話すが、人に言うな、あれは皆んな、お駒の細工さ」

「へエ——」

「お勝手からそつと出て、遠廻りして庭木戸を入つて、姉の仇あだを討つつもりだったんだよ。帰る時は身体が軽いから、羽目を越しもして下肥汲ぐみの通る細い路地から、アツと言う間に自分の部屋へもぐり込んだのさ——」

「白無垢で、雪の晩だけねらつたわけは？」

「白無垢は姉の形見かたみさ。あんなものが、玉屋から届いたガラクタの中にあつた事を、佐吉も気が付かなかつたんだ。稲荷様へ行つて、駕籠へ乗つて中で着換きかえたのは、わざわざ遠方から来た、怪物えともに見せようと言う細工さ。あの女はあれでなかなか馬鹿じゃないんだよ」

平次の話は明快ですが、たった一つ、まだガラツ八にも解らないことがあります。

「昨夜ゆうべのはすると誰です。お駒も中にいた筈だから——」

「馬鹿だなア。お品さんは、そんな事にかけてちゃ、申分のない役者だよ。稲荷いなり様から辻駕籠に乗って、お駒がやった通りに運はこんだ

までの話さ——それでもしなきヤア、佐吉は百両と言う大金を出す気にならないだろうし、何時かはお駒が下手人げしゅにんと言うことが解って、三輪の万七兄哥などに縛られるよ」

昨夜ゆうべの白無垢しろむくは、石原の利助の娘のお品とは、佐吉も万七も、当のお駒も気がつかなかったでしょう。

「へエ、そんな事をしても宜いんでしょうか」

「何をつまらない。御法度ごはつとの敵討かたきうちさえ、筋が立てば、大ビラにやらせる世の中じゃないか。姉妹二人十何年も死の苦しみを嘗なめさせられて、その上姉が首を吊つったんだ。その仇あだを討うった妹を縛くわれって言うなら俺は十手をお上へ返すよ」

平次は感慨深くそう言いました。滅多に人を縛らぬ、一名縮尻しくじり平次は、こうして『雪の精』を見逃してしまつたのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

精の雪

初出―「文藝春秋オール讀物號」昭和七年十二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第一卷
河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>